

課題名 知的障害者の生涯学習支援に関する研究 —— オープンカレッジの試みを通して ——

研究代表者名 川住 隆一 (人間発達臨床科学講座)

研究組織等 田中 真理 (人間発達臨床科学講座)
菊池 武剋 (同上)
市毛 哲夫 (成人継続教育論講座)
細川 徹 (人間発達臨床科学講座)
杉山 章 (人間発達研究コース)
鈴木 恵太 (同上)
中村 保和 (同上) (現・福井大学教育地域科学部)
滝吉 美知香 (同上)
北 洋輔 (同上)
野崎 義和 (同上)

研究目的と方法

近年、わが国の一部の大学においては、地域社会に対する貢献の一環として、公開講座(オープンカレッジ)を通して知的障害者の生涯学習支援が試みられるようになってきている。この取り組みの一般的ねらいとしては、第1に、知的障害者が学習を通して社会人としての生活や個人の生活を豊かにすること、第2に、当事者同士の交流が促され友人関係が広がることあげられている。われわれもこのような取り組みの重要性を認識し、昨年度より「杜のまなびや」という講座名での取り組みを開始した(川住, 2007; 大内・杉山・廣澤・鈴木・北・田中・川住, 2007; 鈴木・大内・廣澤・笹原・中山・半澤・中村・川住, 2007; 杉山・佐藤・北・小島・榎本・田中, 2007)。しかしながらわれわれは、上述のねらいの他に独自の観点として、知的障害者が大学で学ぶことの意味は、彼らが学ぶことの楽しみを見出すことや新たな知識を得ることだけではなく、大学生と知識・体験を共有し討論の中から様々なことに気付くこと、また教員・学生が専門性を問われる場面に立ち会うことにあるのではないかと考える。そこで本研究においては、(1)知的障害者の学習ニーズを探りつつ、東北大学大学院教育学研究科の専門性を生かしたオープンカレッジの学習プログラム内容と援助方略を昨年に引き続き探ること、(2)講座に参加した学習者(知的障害者)と共同学習者(学部学生)の意識の変容について探ることを目的とする。



Fig.1 パンフレット

研究経過

(1) 研究スタッフは、上記5名の教員および発達障害学専攻の6名の大学院生である。また、この研究スタッフ以外に、4名の大学院生・学部学生が学生スタッフとして参加した。運営には、主として川住・田中と発達障害学専攻の大学院生・学部生が携わり、「総括」「広報」「会計」「企画・庶務」を分担した。講座の講師は、田中・菊池・市毛が務めた。

- (2) 当オープンカレッジの名称は昨年度に引き続き「東北大学オープンカレッジ『杜のまなびや』」とし、講座は7月14日（土）、8月4日（土）、9月1日（土）の3回実施した。講師および講義題目は、次の通りである。
- 1回目 田中講師 「自分ってなんだろう？」
 - 2回目 菊池講師 「はたらくということ 2」
 - 3回目 市毛講師 「スポーツについていろいろ考えてみる」
- (3) 講座の対象として、学習者は言葉による会話とひらがなによる読み書きが可能な18歳以上の者10～15名、共同学習者は本講座に関心のある学部学生10名程度とすることにした。また、3回を通して参加可能であることが望ましいとした。パンフレット（Fig.1）を作成した後、昨年の受講者を中心に受講者を募った結果、学習者10名（一般・福祉就労者で全員が昨年度の受講者）および共同学習者9名（教育学部生7名、経済学部生2名）からの参加希望が得られた。
- (4) 研究目的の(2)のため、講座対象者に対し事前・事後の面接・アンケート調査を実施することにした（事後面接は学習者に対してのみ実施）。また、各講座の感想を把握するため、各回終了時にもアンケート調査を実施した。
- (5) 各回とも講義資料を作成した。資料は、講師の原案を踏まえて、講師と担当研究スタッフが話し合いを重ね、パワーポイント資料へと作り上げていった。また、資料の漢字にはひらがなのルビを付した。弱視者には拡大文字資料を用意した。授業時には、資料のみならず参考となる具体物や映像資料も取り上げられた。また、読み書きが苦手な学習者（弱視者1名を含む）の横には、スタッフが学習支援者として待機した。グループ討論の際には、スタッフが司会役を務めた。
- (6) 各講座の時間は2時間とし、a. 講師の話、b. 実技・実習、c. 休憩、d. 受講者同士の討論と発表、e. 講師によるまとめの時間、f. アンケート記入で構成した。実施ごとに映像・音声記録を残し、また、各講座終了後、スタッフ全員で若干の省察時間を設けた。講師にもインタビュー調査を行った。
- (7) 面接・調査の実施、および音声記録の文字化は、研究スタッフの大学院生によって行われた。

研究成果と課題

研究成果として、ここでは3回の講義後に実施されたアンケート調査の結果の一部を取り上げる。この調査では7つの質問が用意され、その1つとして、受講しての感想を記す自由記述欄が設けられている。この欄には、3回の講義において、学習者のべ28名中23名よりの回答が（一部の人に関してはスタッフによる聞き取り）、共同学習者のべ26名中25名より回答が寄せられている。回答内容は、大きく4つに分類された。すなわち、(1)各回の講義全般に関すること、(2)講義の内容に関すること、(3)グループ討論に関すること、(4)その他（オープンカレッジに参加しての感想、希望等）である。Table 1に回答の

一部を掲載した。

ここに記載された内容からも読み取れるように、回答者全員が、講義内容や討論の展開について肯定的評価（楽しかった、学ぶことが多かった、他者の意見を聞くことができよかった、次の機会にも参加したい、等）を述べており、講座の内容と進め方は概ね成功したと考える。送迎のために立ち寄った数名の学習者の家族からも、学習者がこのオープンカレッジを有意義に過ごしたことや次回を楽しみにしていることを伺っている。一方、受講者の意識の変容に関しては、ここで検討した結果だけでは明らかではないが、少なくとも、共同学習者として参加した大学生らにとって、それまでの障害者感が大きく揺さぶられる体験をしたのではないかと推測している。この点に関しては、より詳細な分析

Table 1 受講しての感想

<p>(1) 講義全般： 「とてもおもしろかったです。またこうゆうじゅぎょうがあったら、さんかしたいです。」(学)*、 「みなさんがとても明るくて、楽しい時間をすごせました。」(共)**等</p>
<p>(2) 講義内容： 「自分の事を勉強できて、とてもうれしかったです。もっとくわしく自分の事をしりたいなあと思いました。」(学)、「自分について真剣に考えたことがあまりなかった。こんなに楽しく自分についてあるいは他の人の自分についての考えを聞くことができるとは思わなかった。とてもいい講義だと思った。よく笑った。」(共)、「今日のせんせいのじゅぎょうは、やくだつことばかりでした。じぶんも、なおさら、はたらいているので、しごとをするたいせつなことや、いろんなことを、今日の中でまなびました。」(学)、「就職する、ということが近づいてきている時に、どこに就職したいか、何をしたいか、という点からではなく、仕事をするとはどういうことか、という点から考えることができたので、よかったです。実際に仕事をしている人の感じていることを聞いたことも、自分の考えを振り返る意味でよい機会になりました。」(共)、「バレーで、うまく、できて楽しかった。テニスは、ボールで、うまく、がんばりました。」(学)、「実際にバレーやテニスをしたのが、一番楽しかったです。大学1年以来体育をやっていなかったのが、体育の授業を思い出しました。」(共)等</p>
<p>(3) グループ討論： 「グループのメンバーが面白い人たちで、楽しかったです。はじめてで緊張してしまったので、次はもっとコミュニケーションがとれるようになりたいと思いました。」(共)、「グループでの話し合いで仕事をしていてうれしいことや大変なことの話し合いがよかったです。同じグループの人の話を聞いたことがよかったです。お金の話題がよかったです。」(学)、「3回の講義を通して、講義内容の他に、参加者の方たちとも仲良く（話ができるように）なれたのでよかったですと思います。話し合いを通して、グループの方の考え方を少し知ることができ、勉強になりました。言葉ではなかなかコミュニケーションが苦手な方との会話がどうしても少なくなってしまうので、もう少しタイミングとか方法が自分でも利用できるといいと思いました。」(共)等</p>
<p>(4) その他： 「またこういうことがあったらさんかしたいです。またきたいです。しごとのことをもっとしりたいし、じぶんたちのしごとばにきて、ここのビデオでやってもらいたいです。しごとというきびしいげんじつを、みんなに、もっとしってもらいたいです。」(学)、「きゅうけいでは、話はあまりしなかった。みんなともっと仲よくなりた。話し合いのときはきんちょうするし、でも自分の意見を言えた。」(学)、「今回の講義を受けて、障害をもつ人との交流の難しさ、それから交流の楽しさを知る良い機会になったと思う。特に参加者の人と会話できたことは、それだけで大きな経験になったような気がした。」(共)、「この『杜のまなびや』を通して、色々なことを考えさせられました。コミュニケーションの大切さ、人を思って行動することの重要さなどです。また次があるなら、ぜひ参加させていただきたいです。」(共)、「『杜のまなびや』がこうしてうまくいったのは、先生・スタッフの方の周到な準備があったからこそだと思います。このような会に参加できてとても有意義でした。」(共)、「短い時間なので仕方ないことだと思いますが、自分のグループ以外の人ともっと交流する機会があったら、来年参加する時もより多くの人と再会を喜ぶと思います。」(共)等</p>

* (学)：学習者、** (共)：共同学習者

を行い、別の機会に報告する予定である。なお、グループ討論については、本誌において杉山らがより詳細な分析を行い、報告している。

今後の課題としては、昨年度に引き続き、学習者と共同学習者の両者にとって学びの喜びに繋がるような講義題目と内容の検討がある。また、数名の受講者が指摘しているように、グループ以外の参加者との交流の機会をいかに設定するかも課題である。

学生スタッフ

本研究の企画・運営・推進に関わった東北大学大学院教育学研究科および教育学部の院生・学生は以下の通りである（研究スタッフ以外、敬称略）。

大学院生：笹原未来・中山奈央・岡野 智

学 部 生：芝 里帆

文献

川住隆一（2007）知的障害者の生涯学習支援に関する研究—オープンカレッジの試みを通して—。東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター年報，第7号，91-93.

大内将基・杉山 章・廣澤満之・鈴木恵太・北 洋輔・田中真理・川住隆一（2007）知的障害者および学生におけるオープンカレッジの意義—東北大学オープンカレッジ「杜のまなびや」を通して—。東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター年報，第7号，13-22.

鈴木恵太・大内将基・廣澤満之・笹原未来・中山奈央・半澤真理・中村保和・川住隆一（2007）オープンカレッジによる知的障害者の生涯学習支援に関する研究（1）—共同学習者からみた意義について—。日本特殊教育学会第45回大会発表論文集，327.

杉山 章・佐藤彩子・北 洋輔・小島未生・榎本泰亮・田中真理（2）—学習者からみた意義について—。日本特殊教育学会第45回大会発表論文集，328.